

## 映画監督中山節夫評伝

## ～独自のスタイルを貫く映画監督～

九州シネマ・アルチ代表 吉村秀二

### 1 はじめに

映画監督中山節夫はその経歴と作品の作風と両面で日本映画界の中で独自の道を歩んできた監督と言えます。映画界への入り口こそ 1960 年代の日本映画全盛期の大手映画会社の日活でしたが、すぐに辞めドキュメンタリー映画の製作会社で番組の制作やフリーの助監督などを続けて 20 代を過ごします。そして 29 歳の時、故郷の熊本に帰り第一作『あつい壁』（1969 年製作）を製作・監督します。それ以降は主に「子どもを真ん中に」した映画の製作を続け、「中山映画」を立ち上げて自ら製作と監督を兼ねる自主制作のスタイルで映画を作り続けてきました。また、今では映画製作・撮影が東京や京都の撮影所ではなく全国各地で製作・撮影される映画が当たり前になっていますが、節夫が『あつい壁』を製作した当時はまだ一般的ではありませんでした。地方で映画を作り続けるというスタイルの先駆者とも言えるでしょう。このような意味で中山節夫は独自のスタイルを作り上げて映画を作り続けてきた映画監督と言えるでしょう。

### 2 生い立ちと経歴

中山節夫は 1937 年（昭和 12 年）熊本県菊池郡合志村（現合志市）に生まれました。父は職業軍人で節夫が 2 歳の時に戦死、母親は小学校教員をしながら一人息子の節夫を育てます。地元の小中学校を経て熊本県立大津高校に進学。当時から映画館通いは始めており「七人の侍」がお気に入りの映画でした。漠然とした映画へのあこがれはありましたが、地方の高校に通う節夫にとって映

画の世界に入るなどということは全く現実味の無い夢物語でした。クラブ活動は「電気クラブ」に入部、もっぱら機械いじりに熱心な高校生でした。またその頃仲の良かった友達が阿蘇の出身の生徒が多かったこともあり、当時から阿蘇の雄大な自然に興味があったようです。卒業後は関東の大学に進みますがすぐに辞め多摩美術学校付属の映画学校に転入、在学中に日活に入社します。その当時の映画会社の入社試験には何千人も応募が来る狭き門でした。映画界を目指したきっかけは大学に入ってみたもののなじめず悶々としていた時期に、当時下宿していた鎌倉で映画のロケをやっているのを偶然見に行ったことだそうです。その撮影現場では足の長い俳優さんが改札をひょいと飛び越えていくシーンがあり「かっこいいなあ」と感動したからだと言っていますが本当でしょうか。

しかしせっかく入った日活を節夫は2年で辞めます。当時の日活は石原裕次郎などが活躍する都会派アクション映画の全盛時代、その中で節夫は早々に田舎者の自分にはこの世界は合わないと思切りを付けたのだと言います。その頃の映画監督を目指す若者は撮影所に入社して10年、20年と下積み時代を過ごし始めて監督になるというのが一般的でしたから、すぐに撮影所を飛び出した節夫はやはり当時から「自分の道を自分で切り開く」という自主独立の精神が旺盛な若者だったのでしょう。

### 3 ハンセン病との出会い

節夫とハンセン病との出会いは中学時代に療養所に出入りしだしたことから始まります。当時の中学では療養所のある地域の小学校から上がってきた児童と一緒にりますが、あるときその生徒たちから療養所に行こうと誘われます。それまで「療養所は怖い」と刷り込まれていた節夫は躊躇しますがついて行ってみることにします。するとその生徒たちが療養所の入所者の人たちとフ

ランクに付き合っていることにびっくりします。当時の日本は戦後の食糧難の時代で、地元の人たちは療養者の人たちと物々交換などで付き合いを深めていたので「ハンセン病が怖い」という差別感や病気がうつるという恐怖心がなかったのだと監督は言います。それ以降、節夫は療養所をたびたび訪れるようになり、当時施設の中でやっていた映画を見に行ったりしていました。上京後も東京での自分の映画のテーマを模索する中で、節夫は療養者の人たちの中に積極的に飛び込んでいきます。そして彼らと交流を深めることでハンセン病への差別に対する怒りを持ち続けることになるのです。

#### 4 監督第一作『あつい壁』製作と公開

今では「ハンセン病」を取り上げた映画も随分できてきましたが、当時は正面から「ハンセン病」をテーマにした企画を取り上げる映画会社はありませんでした。例えば『あつい壁』と同じ年 1969 年に公開された日活映画『私が捨てた女』は遠藤周作の原作小説を『キューポラのある街』の浦山桐郎<sup>うらやまきりお</sup>が監督した作品ですが、公開された映画には原作の後半の主人公がハンセン病療養者で働く重要な部分が全く描かれていません。当時の社会の中で「ハンセン病」を取り上げていくことは難しい時代でした。そのような時代に節夫は「黒髪校事件」という「ハンセン病問題」を正面から描く映画の製作を決意したのです。そして故郷熊本に帰り自ら製作実行委員会を立ち上げ、2年の準備期間をかけて映画を完成させます。療養所の方々の物心両面での協力をはじめ地元のさまざまな方々の協力がありました。しかし、完成した映画を全国に配給する大手の会社はありません。当時独立プロの配給を行っていたところもさまざまな事情で協力が得られませんでした。困った節夫は自ら中古車を購入してその車に映写機を積んで全国を上映してまわるという行動にでます。「まだ若かった

からできたんだ」と本人は言いますが、日本の映画監督の中でこんなことをやった映画監督が他にいたでしょうか。現在、菊池事件を描いた『新・あつい壁』の再上映が事件の再審請求運動の中で広がっていますが、節夫は呼ばれると各地の上映会場に駆けつけます。自らの映画を自ら観客に届けるという節夫の真摯な姿勢は今も変わっていません。

## 5 子どもたちを真ん中に据えた映画作り

監督第2作以降は、節夫はさまざまな教育問題をテーマに映画を作り続け、三無主義と言われていた高校生たちを主人公にした『青春狂詩曲』(1973年製作)、ツッパリ少年と教師の交流を描く『ブリキの勲章』(1980年製作)、不登校の体験をつづった絵本を原作にした『あかね色の空を見たよ』(2000年製作)などの話題作を生み出すことになります。これは当時の自主製作映画が「親子映画」運動に依拠していたという側面があったからと思われるが、やはり『あつい壁』でハンセン病の偏見と差別の中で苦しむ子どもたちに目を据えて描いた節夫の視点が子どもを中心にした映画作りに繋がっていったのでしょうか。

それらの作品の中で当時大問題となっていたイジメをテーマにした映画『やがて…春』(1986年製作)の試写に立ち会ったときの筆者の記憶は今でも強烈に残っています。親子映画の事務所で役員と監督との内輪の試写会でしたが、その感想会での評価は芳しいものではありませんでした。特に現場の教師上がりの役員からは、「いじめの描写があまい」「現実はもっと深刻だ」「このような教師はいない」などという散々な評価でした。私は「監督を目の前にして言いたい放題によくいうものだなあ」と心配になり、監督が怒り出すのでは内心冷や冷やしていました。監督はまだ50前の血気盛んな時期です。しかし監督は冷静に製作の意図を説明し「現実の厳しさは理解しているが、映画は希望が

あるラストにしたいのだ」切々と話したのをよく覚えています。この節夫の映画作りの原則とも言うべき姿勢は彼の作品で一貫しています。節夫の映画のラストは必ず観客に「希望」を感じさせるラストになっています。この『やがて…春』は試写会での酷評に反して全国の親子映画会や学校やPTAなどで上映され大評判になりました。節夫の映画の中で最大のヒット作です。観客には節夫の姿勢が十分伝わった結果でしょう。

## 6 粘り強く密着して撮影するドキュメンタリー映画

劇映画の監督としてデビューした中山節夫でしたが、一方でドキュメンタリー映画の分野でもすぐれた作品を生み出しています。『いまできること』（1977年製作）は熊本県にある重度心身障がい者施設芦北学園を1年7か月にわたって撮影したドキュメンタリー映画で、『海と太陽と子どもたち』は天草の分教場で夫婦で教える教師と子どもたちを2年にわたって撮影した作品です。この2作品とも長期間の粘り強い撮影と同時に、節夫の被写体の人間に向ける温かい眼差しが作品の魅力となっています。このドキュメンタリー映画作りの手法は節夫の劇映画の中でも生かされています。例えば主役にプロの俳優を使わず、素人の中から選んで起用する。（『原野の子ら』『あかね色の空を見たよ』など）また子どもたちもプロの子役をできるだけ使わず「本物の子ども」を使う（『あつい壁』『原野の子ら』など）ことは中山映画の魅力と言えるでしょう。

## 7 『原野の子ら』の製作と公開

当時還暦を迎えた節夫がもう一度故郷熊本で映画を作ろうと決意して完成させたのが『原野の子ら』です。この作品は阿蘇に赴任した新任教師と子どもたちとの触れ合いを1年間の阿蘇の大自然の中で描いた作品ですが、この作品も節夫は自ら先頭に立って製作実行委員会を立ち上げ、製作資金を集めます。

撮影は阿蘇の四季を取り入れた1年間の長期撮影となり、当時低予算の映画でも20名から30名くらいのスタッフで撮影するのが当たり前でしたが、製作費を抑えるためにこの映画のスタッフは最低限に絞りました。「七人の侍で撮影した」と本人は言います。映画が完成すると熊本県内ではくまなく上映され大評判となりましたが、全国的にはなかなか広がりません。そんな中でこの節夫の映画が日本国内だけではなくアジア各国の映画人の心に響いて評価された現場が福岡の映画祭でした。この作品はその年のアジアフォーカス福岡国際映画祭に招待され監督も参加しました。映画評論家の佐藤忠男氏がディレクターを務める映画祭で、ここでは映画の上映だけでなく佐藤さんが主催してさまざまなシンポジウムが開催されていました。その時は「アジアの映画製作の現状」というテーマのシンポジウムで筆者も監督と一緒に参加しました。当時のアジアの国々では映画産業が確立しているところは少なく、ほとんどの国では監督や映画製作者は資金面でも大変な苦労を重ねながら映画を作っていました。パネラーになった各国の監督たちはそのような現状を切々と訴えていました。シンポジウムが終わり司会の佐藤さんが観客から意見感想を求めると、私の隣に座っていた中山監督が手を挙げて発言したのです。

「わたしは日本の映画監督で30年間映画を作り続けてきたが、毎回資金面でも苦労の連続です。この『原野の子ら』は60歳になる私の最後の作品として故郷の熊本で作った映画です。」するとシンポが終わると壇上の監督たちが次々に中山監督の周りに集まって握手を求めてきました。彼らの話を聞いてみると「日本は金持ちの国でこの国の映画人は自分たちのような苦労はしていないと思っていたのに、ナカヤマさんのよう映画監督が日本にもいることを知って驚き共感した」というのです。当時はまだ日本はバブル経済の時代でした。

『原野の子ら』は日本の観客だけでなくアジアの映画人にもシンパシーを広げ、この映画祭をきっかけに中国、イランなどの映画祭にも招待されました。そし

てそれは 2 年後の古巣の日活製作の日本とイランの合作映画『旅の途中で FARDA』（2002 年製作）の監督に起用されることに繋がったのでした。

この映画祭以降 10 年間は立て続けに 5 本の作品を監督・制作し、節夫にとって一番旺盛な製作期間となりました。

## 8 中山映画の良き理解者、映画評論家佐藤忠男

前述のアジアフォーカス福岡国際映画祭のディレクターを務めた映画評論家の佐藤忠男は中山映画のよき理解者でありました。佐藤忠男は日本の映画評論家の中でも独自の地位を築いた人で、特にアジア映画を発掘して日本に紹介した業績は高く評価されています。また日本映画学校（現日本映画大学）の学長としても若い映画人たちの育成に貢献されましたが、その佐藤忠男は中山節夫の作品のよき支援者でもありました。『あつい壁』の製作当時の映画チラシに佐藤はこのような文章を寄せています。「中山節夫は、以前テレビのドキュメンタリー映画で、やはりハンセン病の偏見の問題を扱った『ある青年の出発』という佳作を発表しており私は当時、それを賞賛した記憶がありますが……。」この作品は節夫の東京時代、テレビのドキュメンタリー番組として監督した作品で、節夫が「ハンセン病問題」を初めて製作した作品でもありますが、それを佐藤はたまたま見ており雑誌に記事を書いてくれたそうです。自分の映画の独自のテーマとして「ハンセン病」を模索していた節夫にとってこの佐藤の記事は大変勇気づけられたものだったと言います。その後佐藤は節夫の映画が完成するたびに毎回の確かな評論を書き続けてくれました。「我が道」を歩み続けてきた節夫にとって佐藤という良き理解者の存在は大きな励ましになりました。

## 9 ハンセン病をテーマにした映画の集大成『新・あつい壁』

このような活発な製作意欲の時期に 70 歳を前にして節夫はいよいよ「菊池事件」をテーマにした『新・あつい壁』（2007 年製作）の製作を決意します。

「菊池事件」は事件の発生が 1952 年（昭和 27 年）、節夫が中学 3 年生の時、犯人とされたハンセン病の元患者の方が無実を訴えながら死刑を執行されたのが 1962 年（昭和 37 年）、節夫が 25 歳の時です。死刑の新聞記事を東京で目にした節夫は、直後に熊本の療養所であった集会にも参加し、入所者から話を聞くうちに何としてもこの事件を映画にしたいと強く思います。しかし「ハンセン病」と「冤罪事件」という大きなテーマのこの事件を描くには当時 25 歳の若者には荷が重すぎます。そこで監督第一作には「黒髪校事件」を取り上げましたが、その時からいつかはこの「菊池事件」をテーマで映画を作らないといけなそうと思ひ続けていました。それから 45 年の歳月を経てやっと『新・あつい壁』が完成したのです。この映画の製作も大変な苦勞の連続でしたが、この映画は中山節夫の映画作りのエキスが凝縮された作品でした。まずシナリオ作りには『あつい壁』からの盟友・脚本家の横田与志と共に何度も事件の現場や療養所を尋ねて綿密な取材を重ねます。そしてこの映画で初めて映像として描かれた「特別法廷」「出張裁判」のシーンも限られた予算の制約の中で忠実に再現します。また、プロの俳優さんたちと一緒に療養所の実際のハンセン病回復者の方たちを登場させることでリアリティを高めています。そして何よりこの映画を完成できたのはハンセン病差別の中で無実を訴えながら死刑を執行された当事者の無念を晴らしたいと思ひ続けてきた節夫の執念に他なりません。

## 10 エピローグ

映画という芸術は決して一人の力でできるものではありません。企画から製

作準備期間を経て、撮影、仕上、完成へと多くの人に関わります。そして撮影に入ってから多くのスタッフの力を結集して 1 本の映画として完成するのです。監督というのはそれらの人たちの力を集結させる司令塔のような存在ですが、節夫のような「独自のスタイルを貫き」「自力で映画を作り続ける」映画作りは、1 本の映画を完成させるたびに膨大な労力を要します。まして、節夫の場合は映画を完成させるだけでは終わらず、自分の作品を観客に届けるというところまで真摯に取り組むのですから並々ならぬエネルギーです。そんな中で 20 本以上の長編映画を現在までに作り続ける事が出来た節夫のこのエネルギーの源はどこから来るのでしょうか。それは若い時から培われたきた人付き合いを大切にしている性格と、映画作りのためならどんなところでも臆することなく飛び込んでいくという行動力でしょう。そんな彼の姿勢が周りの人々の心をひきつけ、応援しよう協力しようという人たちが毎回集まってきて映画を完成させることができたのです。

そしてこの彼の性格は 10 代の多感な時代を過ごした故郷熊本の風土と友人たちによって培われたものではないでしょうか。中学時代に出会ったハンセン病療養所の人たちとの付き合いは映画作りの中で深められていき、高校時代の友人、同窓生たちとの付き合いはいまでも続いています。母校のサッカー部が選手権大会で試合をするときは寒風の中でいまでも応援に駆け付けます。

節夫は今年米寿を迎えますが、その映画作りへの情熱は決して衰えてはいません。中山節夫の次回作を待っている観客は熊本県内、日本全国にいるに違いありません。